炭素通貨構想における価値形態の問題
――バイオミミックな観点から

添田馨（大阪経済法科大学 アジア太平洋研究センター）

1．皇帝の貨幣と神の貨幣

「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。」（新約・マタイ伝22.21）―炭素通貨の構想に着手してから、新約聖書の章句におけるイエスのこの言葉は、私にとって暗夜を照らす一筋の灯明のごとき輝きを確実に増幅させていった。本論考は炭素通貨というまったく新しいかたちの価値の交換の哲学を企図したものだが、私の脳裏につねに去来していたのは、この古代の宗教的直感によって図らずも導かれるところの、世界像の大幅な修正いがいではなかった。

炭素通貨とは、炭素という元素名の素粒子をではなく、二酸化炭素に代表される温暖化ガス（GHG：Green house gas）の排出権利そのものに、通貨としての権能を持たせたものだ。同時にそれは、まだ架空の次元にしか存在しない価値標章である。だが、「皇帝のもの」であるデナリオン銀貨を手にイエスが語ったとされる先の言葉の、特に「神のもの」と呼ばれた未知の貨幣のイメージは、この間ずっと私をとらえて離さなかった。

二酸化炭素の排出権は、いまや国際市場間で日々取引されるまぎれもない商品である。と同時に、排出権そのものは会計的にも資産価値を有する“財”として明確に定義されている。その発生量の算定に当たってはきわめて整合的な計算根拠が開示されており、こと排出権の現象形態を見るかぎりでは、論理的に不透明な箇所はすこしも見当たらない。だが、このあまりにも明白すぎる事実は、逆に私たちにいまだ隠されたままになっている思想上の盲点があることを示唆しているように感じる。特に私が不満に思うのは、多くの論者が排出権のメカニズムの説明に百万言を費やすことはあっても、誰一人として排出権という新たな経済的価値がよってきたる根源のメタフィジックスについて、それを哲学的に解き明かすリスクを侵そうとしていないことだ。

なるほど、周知のように排出権はそれそのものがすでにして一個の商品カテゴリーであり、文字どおり眼に見えない独立財でもあるだろう。だが、私の見解を述べるなら、それは商品カテゴリーや独立財である以上に、何かとてつもなく巨大なものの末端に位置するひとつの価値鏡、すなわちそれの価値反射を映すモニター画像のようなものである蓋然性がきわめて高いというものだ。

私の直感がとらえた、この何かとてつもなく巨大なものとは、そのまま普遍的な価値の源泉にまでまっすぐに通底していく一片のイメージに過ぎないが、それがなぜ通貨のイメージで構想されるのか、その必然性についてはここでどうしても言及しておく必要がある。

そもそも地球全体における炭素の循環がどういうものであるかを考えてみよう。『地球生態学』（竹内均、長谷川洋著、講談社学術文庫、1984年）の中から以下の記述を引用する。

> 自然界における炭素の循環は植物を軸としておこなわれている。大気中には約320ppmの炭酸ガス（二酸化炭素）が含まれている。陸上の植物はこの炭酸ガスをとりこんで、光合成によって有機物として固定する。これが植物の総生産である。固定された有機炭素のうちのかなりの部分は、植物の呼吸によって炭酸ガスとなって再び大気中へもどってくる。総生産から呼吸量を差し引いた残りが植物による純生産（net production,NP）である。
>
> （第四章 炭素の循環）

地球という惑星環境をそれじたいが自律的な

物理システムの系と考えた場合、その生成と維持において、生命系のシステムがそこで中心的な役割を果たしていることに気づかされる。生態系（ecosystem）とは、まさに生命系システムを通して見られた地球環境のイメージに他ならないが、なにより特徴的なのはそれが熱力学の第二法則に逆行するカテゴリーそのものの拡張概念を含んでいることである。上記の引用文から明らかなように、地球における炭素循環は植物の光合成活動におおきく依存している。このことは、少なくとも炭素原子の自然界での存在形態（のひとつ）である炭酸ガス、とりわけそれの哲学的な把握を志向する際に、その根底が生命系システムの科学的理解のもとに置かれなければならない根拠をも提供している。

最初に述べたように、炭素通貨は新しい価値の交換のための哲学を内在させなければならない。そのために、二酸化炭素とその排出権の価値をめぐる理論は、必然的にこれら生命系システムをみずからの有効な参照枠として採用することになるだろう。

閉じたシステムにおけるエントロピーは増大する――これは熱力学の第二法則として一般によく知られた命題だが、これとは対照的に生命系システムにおいてはこの法則に抗うように、エントロピーの低い状態が個体の死にいたるまでずっと維持されることになる。そんなことがなぜ可能なのか。それは、生命活動がそもそも世界に対して開かれた自律的システムであることと深く関わっているのは言うまでもない。

本論の鍵概念であるところの二酸化炭素排出権、その経済的価値を根拠づけるための最良のフィールドは、従って、おなじく自己生成的な内部機能をあわせ持つ循環型のシステム像として描かれなければならないだろう。

生命系システム以外のところで、こうした自己生成的なメカニズムを不断に更新させている社会的機構とは、通貨システムである。二酸化炭素排出権とその価値の根源が、貨幣モデルすなわち炭素通貨論として探求されるべき必然性も、この一点に存する。

2．排出権クレジットの価値形態

炭素通貨モデルは、その本質部分を、二酸化炭素の有効な排出削減量とその信用保証（クレジット）及び価値の尺度標準の三要素に分解してこれを捉えることができる。いわばこの三つの要素が合成された結果、流通手段としての機能を具備するにいたったものが、炭素通貨というものの中心的なイメージである。

これらの要素のうち、有効な排出削減量と信用保証についてはすでに現実の流通部面においてそのアイデアは確立されており、価値の尺度標準のみがいまだ未装備なのが現状である。私はカーボン・オフセットに利用するため取引される二酸化炭素の排出削減量、その所有権のことを、実際の削減量や制度的な排出枠と区別するため、以後「排出権クレジット」と呼ぶことにするが、炭素通貨はこの排出権クレジットが価値の基底を構成する貨幣商品のことだと、とひとまず定義しておく。

この定義に沿った場合、従来の通貨についての定義と炭素通貨のそれとのあいだには、内容においてどのような異同が生じることになるのか。まずはマルクスの古典的な貨幣の規定づけを、ここで参照してみよう。

> 価値尺度として機能し、したがってまた身みずから、あるいは代理を通じて、流通手段として機能する商品は、貨幣である。したがって、金（ばあいによっては銀）は貨幣である。金が貨幣として機能するには、一方では、その金製（ばあいによっては銀製の）肉体をもって現われなければならず、したがって貨幣商品として現われなければならぬから、単に価値尺度におけるように観念として存すればいいというわけでもなく、流通手段におけるように、代理可能であるというわけにもいかない。他方では、金自身が、いまや自分の身をもって行なうか、代理を通じて行なうか、いずれにしても、その機能が、金を唯一の価値様態として、または交換価値の唯一の妥当なる存在として、単なる使用価値としての他の一切の商品にたいして、固定するのである。
> （『資本論』第一巻「商品と貨幣」第三章、第三節「貨幣」向坂逸郎訳）

マルクスのこの記述は、金本位制の時代における貨幣の輪郭をとてもうまくなぞったものだ

が、引用文のなかの「金」を「排出権クレジット」に置き換えて読んだ場合、マルクスのこの規定づけは、そのまま現在の炭素通貨モデルの本質にまで届いているだろうか。

ふたつの点で、それは届いていないと思える。

ひとつは、排出権クレジットは金や銀のような「肉体」を持っていないこと、もうひとつは、排出権クレジットが「交換価値の唯一の妥当なる存在」としていまだ認知がなされていないこと、この二点である。これらの事実は、現在、炭素通貨論が思想的に突き当たっている本質的な問題の所在、すなわち私たちが解決すべき最大の障壁がどこにあるのかを如実に物語っている。

実は、排出権クレジットが「肉体」すなわち金が有するような素材価値を当然ながら持っていないことと、それが一般的な等価形態を獲得するに至っていないことには、共にひとつの共通した背景が伏在している。それは、排出権クレジットひいてはその発展形態である炭素通貨において対象化されている価値の源泉が一体何であるのかについて、いまだ有効な解明がなされていないことだ。

ここでふたたびマルクスの言葉に立ち戻って考えてみたい。彼は貨幣において結晶化している価値の本源にあるのは、貨幣商品のうちに対象化され、すでによそよそしいものにまで外化されてしまった「人間労働」の尺度である「労働時間」そのものだと言っている。

> 諸商品は貨幣によって通約しうべきものとなるのではない。逆だ。すべての商品は、価値として対象化された人間労働であり、したがって、それ自体として通約しうるものであるから、その価値を同一の特殊な商品で、共通に測り、このことによってこの商品を、その共通の価値尺度、または貨幣に転化しうるのである。価値尺度としての貨幣は、商品の内在的な価値尺度である労働時間の必然的な現象形態である。
>
> （同前　第一節「価値の尺度」）

マルクスがここで依拠している労働価値説においては、すべての商品はそれを作り出した人間の労働行為の対価物に他ならない。この理念は、そのまま現在においても原則的に妥当するものだと言ってよいだろう。だが、価値の同一の尺度すなわち一般的等価形態としての貨幣商品である「排出権クレジット」にまでその理念の対象範囲を拡大させた場合においても、依然それは妥当するであろうか。

妥当しないと私は思う。その理由は、排出権クレジットが、古典的な意味での「人間労働」によって直接に生産される商品対価物ではない点に集中的に現われている。言い換えれば、それは農産品でもなければ一般的な工業生産による製品でもなく、同時にまたソフトウェアのような知財価値そのものでもなく、また何らかの福祉サービスの類などでもないからだ。第一次から第三次までの産業連関のいわば外側に、この排出権クレジットという価値物はそもそもの発生根拠を持っているのである。

安易にそれを、地球温暖化防止という政治的テーマに向けての国際協調路線の延長上に位置づけ、意図的に選択された行動規範によって説明することも、私には危険な議論に思える。かような粗雑な議論を凌駕して余りある価値の中心が、その背景には潜在していると思われるからである。

マルクスは貨幣の内在的な価値尺度を、そこに凝縮された人間労働の物理的な時間量のうちに見出した。だが排出権クレジットの場合、それが人間労働の直接的な生産物ではない以上、同様の尺度をそこで無条件に適用することはできない。この問題を解決するには、人間と労働に関する基本概念のさらなる拡大が必須のものとなる。

3．広義の経済学から普遍経済学へ

経済学が生態系（ecosystem）を明確に意識しだしたのは、1970年代に入ってからのことである。「これからの経済学は、社会の生産と消費の関連をこれまでのように商品形態または市場のワク内でのみとらえることをやめ、あらためて自然・生態系と関連させて、したがって広義の物質代謝の過程としてとらえなおさねばならなくなってきた。経済学史における大きい転回点といわねばならない。」（玉野井芳郎「エコロジーを求めて―経済学における分析視座の転

換―」『エコノミーとエコロジー』みすず書房、1978）――このような見解は、市場内部の経済現象を記述するだけの狭義の経済学が、市場外部の全体環境をも視野に入れたうえでの広義の経済学へ脱皮しなければならない必要を説いた、わが国でも早い時期の秀逸な論文として、注目すべきものである。以下にその一部を引用する。

> …ほんらい消費過程は人間の個人的生活過程であって、それ以外のなにものでもない。それが労働力の生産過程とみなされるのは、資本主義という特殊な市場経済によって強制された一種の形態的外観――フィクション――というほかはない。そしてそのようなフィクションがなりたつのは、実は労働力自身が商品形態をとっているからである、とマルクス理論は教えるのである。物質代謝の広義の経済学は、このような外観が拒否されるところではじまるといってよい。今日、生産と消費の連繋の基礎にある生態系の存在が明示され、その生態系が脅威をうけている事実が社会問題となってきたことは、消費過程に労働力の生産過程の外観を強制する資本主義的市場経済の形態にたいして、いわば社会的実体がこの外観を拒否することにひとしいとでもいえるだろうか。マルクス経済学の表現を用いてこれを別の側面でいってみるなら、資本主義的市場経済はその内部でつくりだした資本の生産力をもはやそれ自身の市場的規模に従って処理できなくなったということにもなる。この点、近代経済学はいわゆる「市場の破綻」をみとめて、問題の解決を非市場的領域にゆだねることを示唆したともいえる。

経済学においてこのようなパラダイムの転換が、1970年代の高度成長期に必然化されたことは、本論のテーマを考えるうえできわめて示唆的だ。生産力の著しい向上が、逆に環境破壊や公害などの外部不経済領域に目をむけさせるきっかけになったとはいえ、このことは私たちにいまだ未解決の古くて新しい問題がたしかに存在していることを明らかにし、あらためてそれを考察の対象として再定位するにいたる動機をも宿していたからである。

その問題とは、経済学における〈自然〉認識に関するものである。

マルクスが人間と〈自然〉とのあいだの物質代謝をもって、〈自然〉を人間の「非有機的身体」と呼んだことはよく知られている。そして、排出権クレジットの実体価値の探求において、この〈自然〉をどう捉えるかということは、かならず一度はくぐり抜けなければならない重要な設問だと思える。『経済学・哲学草稿』において、マルクスは次のように述べている。

> …人間の普遍性は、実践的にはまさに、自然が（1）直接的な生活手段である限りにおいて、また自然が〈(2)〉人間の生命活動の素材と対象と道具であるその範囲において、全自然を彼の非有機的肉体とするという普遍性のなかに現われる。自然、すなわち、それ自体が人間の肉体でない限りでの自然は、人間の非有機的身体である。人間が自然によって生きるということは、すなわち、自然は、人間が死なないためには、それとの不断の〔交流〕過程のなかにとどまらねばならないところの、人間の身体であるということなのである。人間の肉体的および精神的生活が自然と連関しているということは、自然が自然自身と連関していること以外のなにごとをも意味しはしない。というのは、人間は自然の一部だからである。
>
> （第一草稿〔四〕〔疎外された労働〕
> 城塚登・田中吉六 訳、岩波文庫）

私は、この引用部分にもしもマルクスが価値形態論を埋め込むことに成功していたなら、排出権クレジットの理論的課題もそこで解消しただろうと空想を逞しくした。事実、マルクスは彼のこうした卓抜な自然観を、これ以上理論的に発展させることはなかった。しかし、私たちが現在直面している排出権クレジットの経済価値の源泉は、まさにこの人間と〈自然〉との物質代謝を媒介とした即融的な関係性において、はじめてみずから創出の開始を見るのである。すなわち現在の私たちに、これまで対象的自然として捉えられていたものが、生命系システムの有機的連関としての生態系（ecosystem）として意識されるようになった意味は、ここから

生じるのである。

人間の生活と〈自然〉との関連を「自然が自然自身と連関している」姿として、マルクスは描き出した。人間であれ人間以外の全自然であれ、それは物質代謝（エネルギー交換）をともなう生命系システムの一連の循環のなかに、明確に位置づけられることを彼は示した。言い換えればこのことは、生命系が生命系自身に連関していることを言っているのに等しい。

金属貨幣に組み込まれている価値を、マルクスは金や銀といった物質的価値から切り離し、その根源に人間労働の集約された時間を見出すことで、貨幣の物神性を剥ぎ取ることに成功した。一方、炭素通貨およびそれのメタフィジックスである排出権クレジットは、これら鋳貨実体の呪縛からはもともと逃れているにしろ、その根源に横たわる価値の実体が何であるのか不分明なままに、地球温暖化対策に名をかりた政策手法的な議論だけが進行してきた。

ここまで考察を進めてきて、私たちは、いまはじめて次のことを言いうるように思う。炭素通貨の価値を直接的に通約しているのは、にわかには信じがたいことだが、人間労働ならぬ〈自然〉がおこなう“労働”（！）なのだと。すなわち、生命系システムが有機的に連関しあう〈自然〉そのものの生態系保持能力、そこから生みだされる有機化合物の全重量こそが、じつは炭素通貨構想を最底辺で支える錨（アンカー）なのだという途方もないビジョンとなって、私たちのこの探求をまったく新しい次元へと導いていく。経済学は、事ここに至って、広義の経済学からさらに高次の普遍経済学への階梯を、否応なく昇りはじめるのである。

4．炭素通貨のバイオミミックな本質部分

私がここまで展開してきた排出権クレジットの概念は、現行の排出量取引制度において売買されているところの各種の認証済み排出権商品とは、基本的に異なる位相にある。確かにそれは炭素通貨構想における価値創成のベースをなすものではあるが、別箇の価格体系をもつ通貨システムの評価対象とはならずに、それ自体が価値の尺度標準として流通すべきものだからである。ただし、私は議論を見えやすくするために、ここではすでに存在する類似の表象を使って、その本質部分の記述に臨みたいと思う。

京都メカニズム・クレジットに代表される認証済み排出権商品には、大きく分けてふたつの類型があった。すなわち、排出削減系と森林吸収系とにそれは大別されている。そして炭素通貨のベースとなる排出権クレジットは、明らかに後者の類型により近接した場所を占めるだろう。なぜならば、炭素通貨の本質は、これまで見てきたようにバイオミミックな要素にその根拠を置いているからだ。私はここで、その本質部分の記述にあたり、植物の生命活動における光合成をもって、その最上のシミュラークルとするものである。

いうまでもなく総ての生物は、生体を維持するために外部からエネルギーを摂取する。そして、地球上の食物連鎖のクサリは、たどっていけば最後にはどれも例外なく植物のもとに行き着く。動物ならば、生存に必要なエネルギーを他の生物の摂食によって補給するが、植物だけはそれを光合成作用によってみずから獲得している。植物に光合成をひき起させる全エネルギーは、いうまでもなく太陽光がこれを備給している。光合成の結果、植物体には二酸化炭素が固定され、そのプロセスを経て炭水化物が合成され、また一方では酸素が放出される。〈自然〉が生みだすところの地上の富の、これが原初の姿である。

人間社会からの二酸化炭素の排出量を、原理的にオフセットしうる機構は、この植物光合成における二酸化炭素の固定作用をおいて他にはありえない。したがって、炭素通貨が二酸化炭素の排出権（排出削減量）をただひとつの価値尺度として内在化させているそもそもの意味は、それが植物の生命活動ひいては地球上の生物のあらゆる生命維持活動の、もっともシンプルかつ根底的なモデル自体を、それが原理面においてそっくり模倣した点に求められよう。言い換えれば、〈自然〉がおこなう労働（光合成）の時間量こそが、排出権クレジットを普遍的な生命活動の等価形態から、他のあらゆる商品への直接的な交換可能性へと通約する、当の実体なのだということである。

炭素通貨構想は、したがって必然的に全自然

を対象とした価値化へと向かうことになるだろう。だが、果たして、そこに見出されるところの排出権クレジット（炭素価値）は、依然として有用性に裏打ちされたままの使用形態を保持しうるものであろうか？

おそらく、ここからさらに先にむけての問いかけは、まったく未知の問題領域に無防備なまま足を踏み入れる危険を意味するだろう。私はそれを敢行するだけの準備も能力も持っていない。だが、私たちは数少ない導きの細い糸をたぐって、今後まちがいなく立ち会うことになるであろう問題系のおぼろげな輪郭くらいは、かろうじて望見することが出来る場所にいる。全自然の価値化――すなわち経済学的に見られた世界像の修正――を視野においた論考が、きわめて少数ながら存在しているからだ。

「自然論」（『ハイ・イメージ論』福武書店、1990）において、吉本隆明は次のように述べている。

> 経済学的な自然は、全自然を対象的な行為の瞬間でしか表示しない。また経済学と普遍経済学とはまったくちがう。自然は有用なものとしてわたしたちをとりまいているのかどうか、決定する根拠はほんとうはどこにもない。これは近似的に捨象したためなのか、それとも本質的に問うべき次元がマルクスにはなかったのか、わたしたちはうまく確定できないできている。自然はさまざまな物質の分布のことで、知覚がその形態を自然としてみているとかんがえるマルクスの自然は、自然がほんとうは、実在としての物質と、時間―空間の変様との二重体から成り立っているという自然概念に変更すべきだとおもえる。それによって価値という概念を物質の形態を変更させる有用な行為の結果に帰するのではなく（帰してもいいのだが）、時間―空間の変様に価値概念を帰することができるからだ。

吉本がここで述べようとしていることは、とても一筋縄ではいかない思想的な諸前提を含んでいて、私がどこまでうまく要約することができるか自信がないが、ひとつだけ言いうるのは、〈自然〉における「時間―空間の変様」を価値概念の中心にすえることにより、マルクスでさえ超えることができなかった〈自然〉における「有用性の限界」を、私たちは理念的に乗り超えるための道筋に立てるということだろう。

吉本は、〈自然〉に対する価値化の領域を無限大の方向に延長させる要素がもしあるとすれば、それはさしあたり「道具の変化と高度化」ではないかとも言っている。しかし、その「道具」が具体的に何をイメージしているのかは言及されていない。私は炭素通貨というアイデアが、ここで吉本のいう「道具」のひとつとして極めて有効なのではないかと考えている。

この観点から、現在論じられているテーマを私なりに敷衍してみよう。

マルクスにおいて〈自然〉が人間にとっての「非有機的身体」として捉えかえされるようになって以降、自然と人間の関係は敵対的なそれから相互的な「組みこみ」の関係に移行した。そして、このような自然認識は、現在の環境思想や生物多様性をめぐる諸々の議論においても、連綿とその底流をなすものである。「有機的身体」を有する人間は、自分の肉体に等しい〈自然〉すなわち「非有機的身体」であるところの対象世界に「加工」を加えることで、それを有用なものに作り変え、自らの生命維持に欠かせぬ物質代謝すなわちエネルギーの交換関係のなかに置きなおす。同時に、無秩序な資源開発や環境汚染が社会的な“悪”と見なされるのは、それを汚したり損壊させたりすることが、結果的には自分の“身体”を損壊したり汚したりすることに相同的だと、どこかで見なされているからに他ならない。

だが、吉本がここで言おうとしているのは、必ずしもそういう次元の問題なのではない。〈自然〉と人間との相互的な「組みこみ」の関係にあっては、〈自然〉は依然として人間による「加工」対象の範囲に止まらざるを得ず、その限りでは環境破壊も環境保全も、おなじ人間的行為のベクトル方向の違いに還元されてしまうだろう。つまり、その関係のなかにとどまる限りは、どこまでいっても、人間の生存行為の現在的な水準において選択される行為の恣意性からは、逃れられないのである。

たしかに環境保全にむけてのさまざまな活動やその思想理念は、無論、それじたい世界にとっては好ましい行為に違いない。しかしその一

方で、必ずといっていいほどこれらの活動実態には、どこか倫理的な規範意識がつきまとって離れないのもそのためだ。なぜなら、そうした倫理的規範を設けることなしに、あるいは何らかの法的な強制力なしに、経済の計数的成長を阻害する環境対策（＊）を、資本主義体制下の商品市場へ構造的に定着させることは、現実的に不可能だからである。（＊炭素税etc.）

この見解を支持する限り、排出権クレジットが、それじたい自律的なシステムを具備した貨幣商品にまで自己転化していくことは、自然過程としても到底あり得ることではない。つまり排出権クレジットは、それが完備された社会システムとして商品市場内部へ構造的に組み込まれない限り、流通商品として“財”の位置にとどまることはあっても、一般的な等価形態としての〈貨幣〉の位相には、永遠に転化することがないという予想に私を導いていく。炭素通貨が、どれだけ激しく渇望しても決して手に入らない“神の貨幣”とのアナロジーで捉えられるとすれば、その最大の理由がここにあると言っていいだろう。

何が、どのような現実条件が、そこには欠けているのだろうか？

最後に、ふたたび吉本隆明のつぎの言葉に耳をかたむけてみたい。

わたしたちがここで漠然としてではあるがいいたいことのひとつは、現在の社会水準でかんがえられる有用性による価値の概念と、その普遍的な交換価値の概念を、全自然が価値化される極限概念から逆にみられた**残余**としてあらわしたいということだ。

（同前：傍点引用者）

こうした価値概念の転倒、すなわち〈価値革命〉へのプログラムこそが、恐らく私たちに課題として残されたそのもっとも枢要な現実条件なのである。